

【特別編集「体験・伝承・防災」（久慈東高）編】（全9編）

実施年度（実施した高校名）

『題名』 番号）（内容の分類）『体験』：被災体験と伝承

『支援』：国際支援・国際交流

『環境』：身近な自然環境を活用した防災・減災

『生き方』：これから私ができること

平成23～26年度（宮古高校）

『3.11から三年目の今、私ができること』

01) 体験・支援・環境・生き方

『3.11から四年目の今、私ができること』

02) 体験・支援・環境・生き方

『東日本大震災を後世に伝える方法』

03) 体験・支援・環境・生き方

平成28年度（久慈東高校）

『3.11から5年を経た今、私ができること』

04) 体験・支援・環境・生き方

『東日本大震災を後世に伝える方法』

05) 体験・支援・環境・生き方

『自然災害と国際協力』

06) 体験・支援・環境・生き方

平成28～30年度（山田高校）

『3.11から5年を経た今、私ができること』

07) 体験・支援・環境・生き方

『身近な自然環境を活用した防災・減災』

08) 体験・支援・環境・生き方

令和2年度（宮古北高校）

『東日本大震災から十年目の今、

私ができること』 09) 体験・支援・環境・生き方

(※ 在籍年度・高校名・学年、氏名（(震災当時の在籍校)・学年）、『題名』)

01)平成 25 年度宮高 2 年 N さん(田老一中 2 年)『3.11 から三年目の今、私ができること』

私は 3.11 の東日本大震災を実際に経験したし、実際に目にしました。その津波があってから 3 年目の今、私ができることは 2 つあると思います。

1 つ目は、後世に伝えていくことです。私達は本当に辛い経験をしました。しかし、これが最後という訳ではありません。津波や大地震は、何年、何十年、何百年後かにはまた起こるものです。もしかしたら、東日本大震災よりもひどい震災になるかも知れません。次の震災でたくさんの人の命を失わないためにも、このことを語り継ぐべきです。大人たちが語るより、私達若者が経験したことを話す方が、これからの人たちにはタメになるのではないかと思います。本当にあったことを話すのは正直辛い部分もありますが、全てを話すべきです。

2 つ目は、3.11 の大震災の反省をもとに、これからの街作りや防災対策について考えていくことです。これから将来、街などを復興・発展させていくのは私達です。その私達が、今からそういうことを考えていくべきです。どんな街にすればたくさんの命が救われるのか、どんなことをすれば多くの人が避難できるのか、それを考えるのはこれからの未来を担う私達だと思います。

3 年前の震災で、たくさんの辛いことや反省があると思います。それを語り継ぎ、考えていくことが私達ができることであり、私達の役割なのだと思います。

02) 平成 26 年度宮高 3 年 K さん(吉里吉里中 2 年)『3.11 から四年目の今、私ができること』

東日本大震災から今日まで、様々な節目で「今の自分にできること」を考えました。その末に辿り着いたのは、「今を一生懸命生きる」ということです。具体性がない、と言われるかもしれませんが、私はこれが「今の自分にできること」であり、「やらなければいけないこと」だと思います。

震災で私たちは多くのものを失いました。未だに戻ってこないものも沢山あります。「明日やろう」と思っていたことができなくなりました。「当たり前だ」と思っていたことの大切さに気がつきました。今、生きているということが、どれだけ恵まれているのかを感じました。それゆえ、私たちは何をやるにせよ、この一瞬一瞬を全力で生きていかなければならないのです。震災により命を落としてしまった方々の分も、有意義な人生を送らなければならぬのです。

私たちが今を懸命に生きることは、将来の社会貢献にもつながります。震災での経験を活かし、未来を創り上げることができるのは私たちです。しかし、「一生懸命」というのは決して簡単なことではありません。辛いときも疲れてしまうときもあると思います。そういう時こそ、東日本大震災を振り返り、忘れないようにすることが大切だと思います。

震災前、当日、直後、全てを知っている私たちだからこそ創り上げることのできる未来を、一生懸命築いていきたいと思っています。復興に役立つ人間に成長していきたいです。

03)平成 26 年度宮高 1 年 Y さん(宮古二中入学前(小 6))『東日本大震災を後世に伝える方法』

私が東日本大震災を後世に伝える方法として最適だと思うのは、シムル島で歌われている「スモン」のように、親しみやすい方法で伝えることだと思います。「スモン」は、韻を踏んだり、リズムカルなので、子どもでも分かりやすくなっています。そして、歌うことによって覚えやすくなっています。歌詞も明るく、避難するときに役立つものが多いです。後世に伝えるべき事は、「津波の恐さ」だけではなく、「どのようにして逃げるか」だと思います。

伝えるためには、歌をつくる他にも、「紙芝居」や「絵本」、「かるた」など、子どもの遊びを取り入れるのが良いと思います。そうすることで、小さい頃から遊びながら津波に対する知識をつけることができます。私が卒業した小学校では、実際に「津波防災かるた」というものがありました。その「津波防災かるた」は卒業生が作ったもので、小学生でも分かりやすくて、内容も面白いものが多かったです。こういったものを、もっとたくさん作って、幅広い世代の人達に楽しみながら覚えてもらえれば、もっと後世に伝えやすくなるのではないかと思います。

震災から時間が経てば経つほど、人の記憶から忘れられてしまうので、後からみても分かるように、形にして残すのが最もいい方法ではないかと思います。

04)平成 28 年度久慈東高 2 年 M さん（小 5）『3.11 から 5 年を経た今、私ができること』

3. 11 から 5 年を経た今、私ができることはたくさんあると思う。

一つは、東日本大震災で経験した辛かった思いから逃げず、忘れないように後世に伝えていくことだ。東日本大震災を経験した私たちにしか分からない地震が起きてからすぐの様子や、家での過ごし方や必要だと思った物などを伝えていけば、また同じような災害が起きた時に少しでも役立つのではないかなと思う。

二つ目は、東日本大震災のときに応援メッセージをくれた方や、支援してくれた方への恩返しをすることだ。今、私たちが普通に生活できたり、車が普通に道路を走っているのは、たくさんの人達の支援があったからだ。このたくさんの人達からの支援を当たり前だと思わず、1つ1つに感謝して、恩返しできる機会があったら、きちんと「ありがとう」を伝えたいと思う。

三つ目は、私たちが住んでいる所よりもっと被害が大きかった所に住んでいる人達の心を癒やすことだ。私たちは、介護福祉でセラピーテックケアを行っている。セラピーテックケアの目的は、ストレスにさらされていたり、精神的に辛い状況にある人にマッサージを提供することなので、東日本大震災で心に傷がある人にセラピーテックケアをして満足感を与え、自信と自尊心を増し、緊張とストレスを減らすことができれば、東日本大震災で傷を受けた人の役に立てると思う。

05)平成 28 年度久慈東高 3 年 A さん（小 6）『東日本大震災を後世に伝える方法』

東日本大震災が起こった時、私は小学 6 年生でした。海に近いこともあって避難訓練や、親に大きな地震が来たら高台に逃げなさい、と言われていたので津波にのまれることはありませんでした。そして水門があったことが何より救いでした。水門は大きな被害を防ぎ、村人の命を救いました。明治、昭和の津波から学び、平成で起きた津波から人々を守ったように、これからも東日本大震災のような被害を出さないよう対策が必要だと感じました。

私は、水門や防潮堤の存在が、東日本大震災、そしてこれまでの津波の被害を後世に伝えることができるものだと考えます。水門や防潮堤がある意味や、震災のときに水門はどのような活躍をし、どのようになったのかを、東日本大震災を経験していない人達に説明することで、伝えていけると思いました。普代の水門には、どのくらいの高さの津波がきたか大きく書かれていたり、明治と昭和の津波がどこまできたかも道路の横に書かれているので、形として残り、分かりやすいと感じます。

私は教師を目指している訳ではないので、多くの子供達に震災の辛さ・恐ろしさを伝えていくことはできません。しかし、もし将来子供ができたとき、震災の話をしたり、私の母が自分にしてくれたように、地震が起きたときどうすれば良いのかを伝えていくことはできるので、そのようにして自分も後世に伝えていけたら、と思います。

06)平成 28 年度久慈東高 3 年 S さん（小 6）『自然災害と国際協力』

私は、講演会話を聞いて、国や宗教によって災害に対する考え方がとても違うと思いました。災害が起こった時、その後の支援の方法は、その国や地域の実情に合わせなければ使用されなくなってしまうこともあるので、よく考えなければならないと思います。

たとえば、ジャッキー・チェンが支援した高台の住宅地域では、使用されずに空き家が多くあることを知りました。空き家になっている理由は、高台にあり安全だけれども、市街地から遠く、交通手段がない人達にとっては不便であるためだと分かりました。住宅を建てる前に、交通手段に困らないようにバスなどの移動手段を増やすか、または、市街地からそれほど遠くなく避難しやすい場所に住宅を建てるようにした方が良いと思いました。

国際協力をするにあたって、その国や地域にどのような支援が必要なのか、また不便なところをどのようにカバーしていくのが課題だと思います。また、その時だけ支援するのではなく、復興した後にもどのようになるかまで考えておかなければならないと思います。支援の方法だけではなく、今後の見通しを持った支援をしていき、災害があったからだけではなく、普段からしっかりと国々の間で協力できる関係になれるよう、交流会や交換留学、ホームステイなど、お互いの文化や現状を知る機会を増やしていけば良いと思います。

07)平成 28 年度山高 3 年 S さん(山田南小 6 年)『3.11 から 5 年を経た今、私ができること』

震災当時、私はまだ幼かった。町では煙があちこちから立ちのぼり、店や家などは跡形もなく崩れ、本来の山田町の姿ではなくなっていた。また、私はこの震災で母を亡くし、前に進むこともできないままとなった。そんな時、私を支え、励ましてくれたのが、家族、友人、他の県の方々、そして外国からの支援だ。

たくさんの方々から支援され、その中で一番心に残っているものは、手紙だ。手紙には励ましの言葉などが書かれており、そのおかげで辛く苦しい日々を乗り越えることができた。また、地域の方々ともお互いに支え合いながら過ごすこともできた。

震災から五年が経ち、私は今、高校 3 年生となった。この五年間は、長いようで短い日々でもあった。そして、私がこの五年間で一番学んだことがある。それは、人の大切さだ。私は、もともと人見知りで、人となかなか接することができなかった。しかし、多くの方々に支えられていると気づき、そこから私も恩返しのために多くの方々に助けたいと思い、一年生から三年生まで、町で行われているボランティア活動に積極的に参加した。ボランティア活動に参加したことによって、子供からお年寄りまで幅広い年代の方と接することができ、人と接することが好きになった。

元の山田町に戻ることはまだ時間がかかるけど、復興することを信じ、人のために生きていきたいと思う。

08)平成 30 年度山高 3 年 O さん(船越小 4 年)『身近な自然環境を活用した防災・減災』

私は自然環境を活用するということで、山田の地形を活かした建物を造り、避難できる場所の整備が必要だと考えます。まず、山田は平地が少なく、山が多いです。その特徴を活かしてより高台への住宅再建が可能です。その為には山を切り崩さなければなりません。山が減れば反対する人達がいるかもしれませんが、その山を崩して出た土を海側の誰も住まない所に持ってきて、新たな苗や木を植えれば良いと考えます。また、誰もが行ける高台の見晴らしの良い所に公園や広場を造ることができれば良いと思います。私が実際に小 4 の時に経験した津波では、高台に上がる所が無く、ただの山の中を 1～6 年生まで泥まみれになりながらも駆け上がったのを覚えています。その時、後方から波がすぐ近くまで来ていて、電柱や家も自分達の方へ勢いよく流れてきました。そんなことがないように、誰でもすぐ上がれる広場があるということです。また、小学校から家へ帰る時に松林を通して帰っていましたが、海沿いにすぐ松林があったおかげで助かった家も船越地区では多いと思います。

なので、山を崩した後の土や木は、海側に持ってきて盛り土をし、さらに松林のような自然環境を造ることが必要だと思います。防潮堤だけでは守り切れないところを林が守り、さらに家が高台にあることで、少しでも被害者や被災する建物などを減らすことができると思います。

09)令和 2 年度宮古北高 2 年 Y さん(小 1)『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

東日本大震災から 10 年が経とうとしています。私は小学生の時、未来の田老を題材にした劇をしました。中学生の時は、「田老を語る会」をしました。「田老を語る会」では、被害状況や当時の様子・教訓などを、津波を経験したことのない人に伝えました。私ができることは、考えて、伝えていくことです。「田老を語る会」は、現在の中学生も行っています。私はそれをこれからも続けていってほしいと思います。

私は震災で家族を 2 人亡くしました。当時まだ小学校 1 年生だった私は、そのことがよく理解できずにいました。ずっと 2 人の帰りを待っていました。そのことを思い出して泣くことが時々あります。亡くなった人のことを思い出すことも私にできることの 1 つです。たとえ亡くなっていたとしても、私の思い出の中で生きていてほしいと思うのです。

私は絵を描くことが好きです。昔から絵で好きなものを表現することが好きでした。私はいつか、もっと絵を描く技術を上げて綺麗な田老の海を描きたいと思っています。現在の田老はお店は建ってきましたが、まだ人が少ないと思います。田老の魅力を知り、それをたくさんの人に広めてほしいと思います。私も自分の絵で田老の魅力を伝えられるように、田老の事をより好きになりたいです。